

序論 倫理的問題としての投票

なぜ投票が問題となるのか

票を投じるとき、我々は統治をより良いものにする 것도、より悪いものにする 것도できる。ひるがえって、我々の票は人々の生活をより良いものにする 것도、より悪いものにする 것도できる。

もし我々が投票において悪い選択をした場合、人種差別的であったり、性差別的であったり、同性愛嫌悪的であったりする法律がもたらされる。経済的な機会が消失したり、実現され損なったりする。我々は不正で不要な戦争を戦うことになる。我々は経済を刺激することも貧困を縮減することもほとんどないような、誤解に基づく景気刺激策や給付プログラムに多額の資金を費やす。よりうまく働くであろうプログラムに資金を投じ損ねる。いくつかの場面では規制しすぎ、また他の場面では規制が足りず、多くの規制は特別利益（「自己利益」）のための不公平な経済的アドバンテージを守るだけの効果しかないものとなる。我々は不正義に苦しめられ、そしてまた不正義を存続させる。貧しい人々

を置き去りにしていく。インナー・シティをゲットー化^[1]するような麻薬戦争を行う。刑務所にあまりにたくさんの人々を放り込む。移民政策及び経済政策を、ゼノフォビアや時代遅れの経済理論の上につらえる。

投票は道徳的に重要である。投票は統治の質、射程、形態を変えてしまう。我々の票の投じ方によって、人々が助けられることもあれば傷付けられることもある。選挙結果は有害なものでも有益なものでもありうるし、正しいものでも不正なものでもありうる。選挙結果によってマイノリティがマジヨリティの利益のために搾取されることもありうる。ほとんど誰にも利益がないまま広範な危害がもたらされることもありうる。それゆえ、本書において私は次のように論じる。我々は、自分たちがどのように投票を行うべきかに関して、いくつかの道徳的な義務を負っているのだ、と。投票は何であれ道徳的に受け入れられるものだというのではないのである。

この本は投票の倫理を取り扱う。とりわけ、政治的な文脈における投票の倫理に関心がある（MLBのオールスターゲームや全米アイドルコンテストの投票についてはない）。この本の目的は、そもそも市民は投票すべきなのか、また投票することを選んだならばどのように投票すべきなのかといった疑問に、結論を下すことにある。投票の倫理という学問領域は、例えば以下のような問いを投げかける。市民は投票すべきなのか、それとも棄権を選択すべきなのか？ 選挙の結果について無関心である人は、棄権すべきなのか？ 市民が投票するとき、どのようにすべきか？ 投票先を決定するにあたって、投票者は自らの宗教的信念を持ち出しても構わないか？ 投票者は誠実に、つまりは自らが最善だと考える候補や立場に対して投票しなければならぬのか？ 最善の候補に投票するというこ

とは何を意味するのか？ とりわけ大事なこととして、投票者は自身の利益のみのために投票すべきなのか、それとも共通善（それが何であるにせよ）のために投票すべきなのか？ 票を購入したり、売却したり、あるいは交換したりすることは果たして受け入れられることなのか？

（これらの問いに加えて、）政治哲学の観点から見て関連性を持つ、以下のようなトピックもある。政治参加を促進することに関して政府は何をすべきなのか？ どのような人々が投票する権利を持つべきなのか？ 選挙はどのように構成され、どれくらいの頻度で実施されるべきなのか？ 政府は投票者を教育するよう試みるべきなのか、またそうするべきだとすれば、どのようにすべきなのか？ 政府は市民に投票するよう強制してもよいのか？ 投票は秘密であるべきかそれとも公開されるべきか？ 有益な問いはいくつもあるが、しかし私はここではこれらの問いに関心を向けない。この本はあくまで市民の義務についてのものであり、政府の義務についてではない。投票をめぐって政府が何をすべきかに結論を下すためには、また別の著作にじっくりと取り組むことが必要だろう。

投票は何と区別されるか？

道徳的な観点からすると、投票は、メニュー表から料理をオーダーすることと同じではない。あなたがレストランでサラダをオーダーするとき、その決定の結果を引き受けるのはただあなた一人である。他の誰も、我慢してサラダを食べなければならないということにはならない。もしあなたが悪い選択をなしたとしても、ともかくあなたが傷付けることになるのはただあなた自身である。多くの場

合、あなたはあなたの決定のコストと便益の全てを自分のものとする。

投票は違う。我々は投票するとき、言うなれば、全ての人々に対して一つの食事を強いているのである。⁽¹⁾もしあなたがディナーの皇帝——全ての人が毎晩のディナーに何を食べるかを決定しなければならぬ——に任命されたならば、あなたの決定が道徳的な重要性を有することは明白である。ディナーの皇帝として、あなたはあなたの決定のコストと便益のほとんどを外部化する（＝他人に負わせる）ことになるだろう。そこには多大な責任が伴う。糖尿病患者には糖分を過剰に摂取させない方が望ましいし、ヴィーガンに肉料理を食べさせたり、ムスリムに豚肉を食べさせたりもしない方がよい。あるいは、もし仮にあなたがそういったことをする場合には、適切な理由があった方が望ましい。

現在では、投票に際して、「その結果を」自分で決められる人はいない。誰の票であっても数えられるが、一票以上に数えられることはない。我々は選挙結果を共同で決定する。重要なのは我々が、どのように投票するかであって、あなたがどのように投票するかではない。しかしながら、共同の活動に参加するにあたって人々がどのように行動すべきかを律するいくつかの道徳原理が存在する。たとえ、大規模な選挙においては個人の投票が選挙結果に重大な影響を及ぼすことはほぼ全くないとしても、個人が義務から解放されるわけではない、と私は論じる。どのように投票するのかについて、投票者一人ひとりが道徳的な義務を負っている。

もちろん、政府がなす善と悪の、その全てが我々の投票のあり方に起因するわけではない。我々の投票行動は政治的結果に影響を及ぼす多数のファクターのうちの一つにすぎない。堅牢かつ確実な民主主義的監視があっても、官僚たちの気まぐれや政治家の墮落のゆえに悪い政策が実施されることは

ありうる。私の目的にとって重要なことは、総合的に見れば、投票はやはり違いをもたらすものなのだということである。(例えば)それぞれの政党は政策的な偏りを——すなわち特定の種類の政策を他のものよりも優先して実施する傾向性を——有している。投票者が特定の政策的な偏りを持つ政党のメンバーのために投票するとき、そのような(当該政党が好む)種類の政策が実施される見込みは非常に大きくなる。⁽²⁾

政治的結果を決定するファクターは投票以外にもある。このことが意味するのは、ただ投票者がより良い投票を行うようにすることのみによって全ての政治的問題を解決することはできない、ということである。要するに、より良い投票は「あくまで」より良い政府を導く傾向を有するものなのだ。

常識的見解に対する反論

投票は市民が統治の質に影響を及ぼすための第一の手段である。民主主義にとってこれ以上に象徴的な活動はない。投票を市民にとっての聖餐式と呼ぶ人もいる。多くの人々が、擬似宗教的な畏敬の念を持って民主主義に、とりわけ投票に参加する。⁽³⁾

このことが意味するのは、人々にはいつ・どのよう⁽⁴⁾に投票すべきかについて確固とした意見を有している傾向がある、ということである。彼らは、投票の倫理をめぐる諸問題に対する答えは明白であると考える傾向にある。投票に対する自分たちの見解を、人々は神聖な教説として取り扱う。自分たちの見解が挑戦を受けることを人々は嫌う。